

# 白氏文集 三十四 長恨歌（四）

加藤淳平

四川より長安に歸りし玄宗の、亡き貴妃への悶々たる思ひを歌ふ。

長恨歌（四）

長恨歌（四）

天旋日轉廻龍馭  
到此躊躇不能去  
馬嵬坡下泥土中  
不見玉顏空死處  
君臣相顧盡霑衣  
東望都門信馬歸  
歸來池苑皆依舊  
太液芙蓉未央柳  
芙蓉如面柳如眉  
對此如何淚不垂  
春風桃李花開日  
秋雨梧桐葉落時  
西宮南內多秋草  
落葉滿階紅不掃  
梨園弟子白髮新  
椒房阿監青蛾老  
夕殿螢飛思悄然  
孤燈挑盡未成眠  
遲遲鐘鼓初長夜  
耿耿星河欲曉天  
鴛鴦瓦冷霜華重  
翡翠衾寒誰與共

天旋めく日轉めく廻龍馭  
ここに到りて躊躇し 去る能はず  
馬嵬坡の下 泥土の中  
玉顏を見ず 空しく死せし處  
君臣相ひ顧みて 盡く衣うしろはを霑す  
東のかた都門を望み 馬にまかせて歸る  
歸り來れば 池苑 皆舊に依る  
太液の芙蓉 未央の柳  
芙蓉は面の如く 柳は眉の如し  
此れに對し 如何ぞ 涙垂れざらん  
春風 桃李 花開く日  
秋雨 梧桐 葉落つる時  
西宮 南内 秋草多し  
落葉階に滿ち 紅掃はず  
梨園の弟子 白髮新たに  
椒房の阿監 青蛾老いたり  
夕殿 螢飛んで 思ひ悄然  
孤燈 挑げ盡して 未だ眠りを成さず  
遲遅たる鐘鼓 初めて長き夜  
耿耿たる星河 曉けんと欲する天  
鴛鴦の瓦は冷やかに 霜華重く  
翡翠の衾は寒く 誰と共にせん

（大意）天下の情勢が變り、時日が経ち、退位した玄宗も、やっと四川を發つ日が來た。馬嵬の坂の下、昔楊貴妃が泥の中で空しく死んだ處に立つ。もうあの美しい顔は無く、帝も隨従の人たちも、一同顔を見合せて涙を流す。そこから東へ、馬の歩む儘に都へ歸つた。歸つて來た宮殿の池も庭も、昔と變らない。太液池の芙蓉の花や未央宮の柳も、芙蓉の花には貴妃のやうに美しく、柳は貴妃の眉を思はせる。それを見て、どうして涙を流さずに居られるか。春風が吹いて桃や李の花が開く日や、秋雨が降り

續き、梧桐の葉の落ちる時は特にさうだ。退位した帝に宛てがはれた西の宮殿にも、南の内裏にも、秋の草がはびこり、落葉が階段を埋め、降り積もった紅葉を誰も掃除しない。昔玄宗が親しく指導した梨園の弟子たちは、すっかり白髪になり、皇后の部屋の主任の形のよい眉も老いた。暮れて行く宮殿に螢が飛んで思ひは沈み、たった一つの燈りをかき立て盡しても眠りは訪れない。時を報ずる鐘や鼓はな

かなか鳴らず、秋の夜はいつまでも長く。漸く明けやうとする空に、銀河が耿耿ときらめく。鴛鴦を彫った瓦は冷たく霜が重く降り、翡翠を描いた寢具を共にする者は誰も居ない。

(平成三十年十月十三日受附)